

駿建

2018 Jul. vol.46 No.2

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

*Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College*

SPECIAL FEATURE

さよなら 5号館 クロニクル

Goodbye
The Building No.5
Chronicle 1959-2018

SPECIAL FEATURE

さよなら 5号館 クロニクル

駿河台キャンパスの「5号館」。

この建物が誕生したのは、1959年のことでした。

東京オリンピックが開催される5年前、東京タワーが竣工する1年前のことです。

周囲には、近隣に暮らす人々の生活がそこかしこに見られたと言います。

それから約60年、変わりゆくまちや社会を見つめながら、

「5号館」には、数々の研究室が誕生し、

3万人を超える卒業生たちを、輩出してきました。

日大理工建築の教員だけではなく、製図室やスライド室には、

大学の壁を越えて、建築界の最前線で活躍する人々が、この5号館を訪ね、教壇に立ちました。

時には、海を越えてスーパースターがやってくることもありました。

その「5号館」が、この10月に、取り壊されることになりました。

9月からは、日大理工建築の拠点は、隣に新築された「(仮称)南棟」へ移ります。

竣工以来、この建物の中では、いったいどれだけの

出会いや対話、発見が、生まれたことでしょう。

今回は、9名の先生たちに、その想い出をつづっていただきました。

時を重ねる中、ひとつの建物を通して、どんなことが起こってきたのかを知り、

その建物が今、失われようとしていることについて考えてみてください。

そこには、「建築とは何か？」という答えの一部があるに違いありません。



Goodbye
The Building No.5
Chronicle 1959-2018

NEW YORKER



改修後も2階に残されたレリーフ（デザイン：小野襄）と木製ベンチと成型アルミ天井。

COLUMN

共に過ごした16万時間以上の時間

19 59年に竣工した理工学部5号館は、今年で59年目を迎え、10月から取り壊される予定と聞く。建設以来、途中で改修が行われながら60年近く利用され続けて今日に至っていることを考えると、5号館は正に当時の名作と評価されよう。5号館は当時の建築学科の計画系（デザイン）、構造系、材料系、環境系など、各分野の著名な教員陣が、その技術の粋を集めて取り組んだ作品であり、**ブルータリズム**の建築物としての価値とともに理工学部の教育・研究拠点として大きく貢献してきた。

私は建設15年後の**1974年**に大学院生として5号館を利用しはじめて以来、助手、講師、助教授、教授、特任教授と教員生活すべての44年を5号館と共に歩んできた。よってブルータリズムの名建築を直接利用し、共に歩んでくれたことを嬉しく光栄に思う。この名建築も時間の経過とともに、経年による劣化や安全性、利便性、快適性の低下が指摘され、**2007年**に大規模な改修が行われた。このときの改修主旨は、1959年当初の設計主旨を現代技術により

保存再生し、現代の要求条件を満足させようとしたものであり、貴重な建築物を後世に伝えようとした。この再生計画には、私も環境工学の分野から協力し、空間内の音響性能や断熱性能の向上、空気環境性能などの向上を目指して、**早川真先生**（当時、建築設備担当教授）とともに設計、施工に関与した。その結果、現状の改修後の5号館は、今年で10年が経過したが、今でも十分な室内環境性能を維持しており、将来の利用にも十分対応できる状況にはある。

ところで、私が大学院に入学してからの44年を振り返ってみると、この44年間のうち、研究室（5号館）で過ごしてきた時間は、およそ166,320時間となり、1日当たりの睡眠時間（8時間）を除いた44年×365日（年間）×16時間（1日の起きている時間）＝256,960時間の65%程度となる。この時間は正に「住居」以上の印象であり、このたびの撤去は、自宅が取り壊されるような寂しさ、虚しさを感じる。当初8階にあった研究室（583A）を本拠地として、入り浸っていた9階の建築学科専用の電子計

text=井上勝夫 特任教授

算機室、論文作成や作業に利用した5階の製図室などが懐かしく思い出される。

また、駿河台キャンパスは典型的な都心の大学の形態で、いわゆる大学内にキャンパス（構内）がなく、ほとんど事務所建築の形態であったが、他に経験のない私にとって、このような形態が都心の大学であると理解してきた。よって、現状の理工学部の形が、私には大学の印象としては強いのである。都心に存在しているため、多くの企業や機関と密接な関係が持て、情報収集や移動性に富んでいたお陰で、多くの利益を得ることができた価値は計り知れない。通信技術や通信網が発達し、情報収集がいつでも瞬時に行われるような時代になっても、やはり教育・研究機関として地理的な問題は重要であり、都心に位置する形を取っていくことは、今後も非常に重要なことと思う。将来も「都心に位置する理工学部」の考え方を継承し、地下、上部空間を有効活用したキャンパス計画を継続して行っていきたい。

■

2

COLUMN

5号館への想いを未来への希望に置き換えて

text= 大川三雄 特任教授

駿 河台キャンパスの中で、最も重要な建物は一体どれか。建築史の研究に携わる者としては、「旧1号館」と「5号館」のふたつであると考えてきました。1929(昭4)年に建てられた「旧1号館」は、本学の創設期に卒業生の方々の手によってつくられた校舎で、「歴史ある理工系大学」としての存在を示す記念的な建築でした。もうひとつの「5号館」は、戦後の復興期において、現在の隆盛の基盤を創られた建築学科の関係者の手によって設計された建築であり、ル・コルビュジェと前川國男の流れを汲む**ブルータリズム**の名作です。このふたつの建築は将来にわたって継承してゆべき建築と考えていました。しかし、残念なことに「旧1号館」は既に解体、「5号館」も本年度中に姿を消すことになりました。

どちらの校舎に対してもさまざまな思い出が残っていますが、特に研究室のある5号館の思い出は尽きることがありません。1975年に私が助手として入ったときの建築史・建築論研究室は、小林文次、近江榮、片桐正夫といった専任の教授たちの他に、近江研預かりの形で黒沢隆、小野正弘、納賀雄嗣といった建築家が卒業研究のゼミを持たれており、建築史・建築論研究室全体では学部生と大学院生とで80名近い学生が所属していました。3部屋を室内でつないだ3スパンの部屋の中央には大きな丸テーブルがあり、いつも誰かが集っている大変に活気のある研究室でした。

そんな研究室にある日、学部2年生だった重枝豊さんが訪ねてきました。大学闘争で途絶えていた関西研修旅行を復活しませんか、という申し出のためでした。重枝さんは同期の岡田章さん(現・理工学部長)

たちと一緒に、建築学生交流会という組織を立ち上げて、大学闘争を機に冷めきっていた先生方と学生たちとの交流を深めることを目論んでいました。関西建築研修旅行もそのひとつですが、その他に秩父の山奥で学生主催の建築セミナーを開催するなど、さまざまな活動を行っていました。レモン画翠に話を持ちかけて卒業設計展(レモン展)を企画させたのも重枝さんです。今年、この活動に対し「日本建築学会賞(業績)」が与えられました。建築学生交流会の最大のイベントが建築展の開催でした。記念すべき第1回の建築展は、岡田章さんを実行委員長として開催されました。机の上にマージャンの牌をピラミッド状に積み上げて微笑む、岡田さんの大きな顔のポス

ターも話題となりました。本格的な建築模型を製作する学生の姿を捉えた、早稲田大学の建築展ポスターのパロディとなっていたからです。

建築展は、現在のような屋台での飲食中心の学園祭ではなく、「構造研究会」のつくる模型を筆頭に、建築に関するさまざまな展示が5号館の製図室を埋め尽くしました。講演会やシンポジウムのための会場となった5階のスライド室は、夜間になるとライブスタジオに様変わりしました。

壊れてしまうふたつの校舎への想いは、未来への希望に置き換えるしかありません。熱い想いで建築学科を牽引してきた世代が、理工学部の中核的立場となって新しい時代を切り開こうとしているからです。 ■

1980



後方の白いグリッドの入ったタイルの壁から、ライブ会場が5号館5階のスライド室であることがわかる。ドラムを叩いているのは近江哲朗さん(劇場コンサルタント)、歌っているのは20代の頃の私。近江さんと同期で、現在は桜建会副会長をされている本耕一さん(元・森ビル副社長)は、現在でも仲間と一緒にバンド活動を続けている。

スライド室が
ライブスタジオになったあのとき...

3

COLUMN

時代が変わる時

大学2年生になり駿河台校舎に移って以来、途中2年留学で不在にした時期はあったが、約50年、この場所に通い続けてきた。5号館が姿を消す半年後には私も大学を辞す。本郷通り沿いで当時の面影を残すのは、ついにニコライ堂だけになってしまう。私が通いはじめた頃、この周辺にはまだ小学校や銭湯もあったし、木造家屋もたくさんあって、生活を営む風景があった。それらが一つひとつ取り壊され、より大きく、高い建物に置き換えられてきた。

かつて理工学部5号館の並びには**中央大学5号館**と**中央図書館**があり、その向こうの中央大学校舎は複数の建物によって囲まれた、とても印象的な中庭空間だった。なぜかこれぞ大学の空間だと感動したのを覚えている。それらも1980年には閉じた。**明治大学**もすっかり様変わりした。両大学の学食や生協はよく利用させてもらった。安い食堂・飲み屋では、他大学生にも出会ったし、所属大学の枠を超えて学生たちが行き来する雰囲気があった。そんな学生街と

いう佇まいも薄れてしまった。**御茶ノ水駅**から神田川越しに見えていた**東京医科歯科大学**のタイル張りの校舎は何の変哲もない建物だったが、壁と窓の大きさの関係、複数の色によるタイル張りのファサードが、ヴェンチュリー風で好きだった。RC打放しと大理石の組み合わせが新鮮だった**コクヨ東京支店**（丹下健三・1961）も良かった。

昨年末ベルリンに行く機会があり、留学時に住んでいた建物の前を通った。当時のままの姿だった。通りの店の入れ替わりはあるし、かつて勉強させてもらったオペラ劇場では、木工場がスタジオ劇場に替わっていたが、外観に変化はなかった。東西ドイツ統一で劇的に変化した部分はあるが、大方の街並みは昔のままである。それに比べて東京は至るところが変化していく。

5号館は僕より9つ年上で、ずっとお世話になってきた。黒いPタイル床、緑色の壁に挟まれた中廊下……。あまりに日常的な場所だったからだろうか、それともあり過ぎるからなのか、特にこれといった思い出は浮かんでこない。が、それでも寂しさ

2000

2000年ごろの7階廊下。

text= 本杉省三 特任教授

はある。私が入学した頃、ちょうど叔父の設計事務所が**9号館**の設計を手伝っていた。その9号館建設に関わっていた先生たちも既になく、叔父も数年前に逝った。ひとつの命が消え、次の新しい命が生まれる。そうして繰り返されていくのがこの世だ。新校舎が次の世代を産み、育んでくれることだろう。それを願っている。

駿



4

COLUMN

プロの住む宮殿だった5号館

text= 重枝豊 教授

時、耐震改修のために仮住まい（現ソラシティの場所）に移ったことはあったが、大学院生時代は9号館、助手以降は5号館が大学での主たる居場所だった。学生時代の卒論・修論の指導は5号館の指導教員の部屋に行って、研究の進行状態を報告する緊張の場であった。節目には現在のゼミのような形での研究発表もあったが、基本的には指導教員にアポイントをとって個人的に教えを請う（主に論文・著作を紹介してもらう）のが基本だった。

大学はのんびりしており、設計課題と実験レポート、いくつかの出席を取る構造・環境系の授業以外は、あまり時間的な束縛はなかった。自主創造という言葉はなかったが、自分で選んだ本を読み、友人たちと議論することが基本だった。自主グループごとにルールがあり、違うグループとはあまり交渉はなかった。自由といっても、グ

ループで決めた論文や著作を読むこと、先生に紹介された研究論文を読まなければいけなかったから、結構忙しかった。

この時期は、教員と学生との関係は学園紛争で断絶しており、後に近江榮先生（近代建築史担当）が指摘された「ノーサポート・ノーコントロールの時代」だった。他大学に行ってみても雰囲気は同じで、先輩と同級生が実質的な教師だった。そのときの想いが、レモン画翠の学生主体の卒業設計展（レモン展）の企画につながった。卒業研究では、東海大学、文化学院の学生と一緒に調査したから、そのときに他大学の学生、教員と接触することの面白さに目覚めたのかもしれない。

卒業研究で実測・聞き取りなどを学んだが、その後、修士・博士課程になっても調査＝研究という日々が続いた。以上のような状況だったから、5号館は学生としての

居場所ではなく、他大学との会議や発表会をするなど「外の社会」に近い存在だった。各教員とはそれぞれの先生流の対応をすることが必要だったが、学生時代から各分野の先生に個人的に相談して、自己実現をするための知恵を授けてもらった。私にとって5号館は「建築のプロの住む宮殿」であり、自己成長のための殿堂だった。

1990年以降はベトナムとカンボジアの調査をはじめたから幽霊先輩と呼ばれ、助手になっても休暇開始当日から授業開始の前日までアジアにいたが、アジア調査で問題が生じると各分野の研究室を訪ねて教えを請う研究生生活が続いた。講義で学んだことより、5号館で各先生に直接指導を受けられたことに感謝すると同時に、その建物がなくなることは自分自身が消えてしまうようで残念でならない。

■

5号館の改修では、3階に中間層免震。1、2階にトグル制震が導入された。





卒業アルバム「建築学科 1978 年度 vol.0」より

1978

5

COLUMN

私と5号館

5号館は1959年生まれということですので、今年で満60歳、還暦ですね。私よりちょっと若いですが、ほぼ同年代です。60年の生涯は人間なら短いですが、この周辺の建物の中では結構長寿ではないでしょうか。学生の頃の街並みを思い出すと、記憶に残っている風格のあったものはほとんど建て替わってしまい、残っているのはニコライ堂くらいです。

5号館との初対面は、私がおそらく学生2年目、5号館が築20年の頃でしょうか。当時の1号館ほど風格はなく、第一印象はちょっと薄かったものの、建築学科の学生としては、この形、色、ちりばめられた彫

刻やオブジェ……何かあるなあとは思いました。その後、近代建築としての評価や当時関わった方の想いなどいろいろとうかがい、再認識したものです。以後40年近くのお付き合いになりました。

長く付き合っていれば思い出やエピソードがあるだろうということで原稿をご依頼いただきましたと思いますが、振り返ってみると昼間は至って普通の研究室での生活をしていて、ちょっとした事件などの小ネタはありますが、あまり面白い話はありません。あえて記憶をたどると、数々の飲み会の場面が思い浮かびます。そういえば私が都市計画研究室に入ったのも、7階の部屋に最初

5号館の中で飲んで語った思い出

text=根上彰生 教授

に訪問したとき、早速先輩と飲み会になったのがきっかけでした。それ以来、結局居ついてしまいました。私の学生時代は今ほど安い居酒屋がいっぱいなかったので、隣の輪講室が結構活躍しました。居酒屋5号館、スナック5号館、夏には屋上ビアガーデンも開店しましたね。ホテル5号館にもお世話になりました。エレベータホールのベンチは、ベッドとしてはかなり硬かったけれど、結構人気がありましたね。あまり住み心地は良くなかったものの、長い間お世話になりました。ご苦勞様でした。 駿

6

COLUMN

緊張に満ちていた5号館の研究室

5 号館での思い出は?というところ……。学部で4年生(1985年)からになります。着手した卒業研究の研究室が5号館の8階にありました。私が所属したのは建築音響研究室。学生時代は音楽ホールや大型ドームの音響設計に強い関心を抱いていました。当時9階にあった建築電子計算機室の大型コンピュータには、研究室で開発された音響解析システムが導入されていて、ここで先生や先輩方から音響シミュレーションの極意(初級編)を教えてもらいました。しかし大型コンピュータとはいえ、当時の機械は今より実行速度は遅く、扱える計算容量も小さく、さらに他の研究室と共用だったので、先輩方は学校に泊まり込みで計算を実行させていたことを覚えています。この研究室は、教授をはじめ助手の先生を含め4人も先生がいる強力指導体制で、さらに研究スタッフにはとても優秀な大学院の先輩方が揃っていました。卒研生の頃は、諸先輩が居る院生室に入るのにも緊張を感じ、自分が大学院生になっても隣の

教授の部屋に入るときには、扉のノブを握る前にふうっ〜と深呼吸しないと入れませんでした(笑)。

大学院修了後は、一旦企業に就職しましたが、縁あって恩師の研究室に助手として戻って来ることになり、現在に至っています。助手になりたての頃は、研究室の諸事や自分の研究、学生の指導などなどで毎日テンパっていました(汗)。ただ、私の居場所は、この緊張に満ちた5号館の研究室の他に、もうひとつありました。

かつて図書館があった6号館の塔屋に、無響室という吸音材に囲まれた特殊な音響実験室があったのです。外部からの音は遮断され、自分の声も響きません。だからこそピアノに音響の研究ができる場所。ここで、音楽ホールやドームの空間設計と生み出す響きの特徴や音楽・音声の聴こえとの関係について実験をしていました。ただし、空調は騒音の原因になるのでオフ。夏場は汗ダラダラ、冬場はダウンを着ながら手袋をして実験をしていました。思うような結果

text= 橋本修 教授

が出なくて凹んだときもありましたが、好きな音響の研究に没頭できて、とても充実した時間を過ごせました。

私が大学院生のときには同期や先輩に音楽好きが何人かいて、実験が終わると「さあ〜音の研究! (笑)」と言いながら手にギターを抱え、無響室の下の実験準備室で夜中まで音楽談義をしたり。ときには無響室にひとりこもって打ち込んだリズム伴奏に自分の歌とギター演奏を重ねた音源をつくり、これに残響をつけて立体音響コンサート会場を再現したり。楽しかった〜! これを書いていたら……色々と思い出してきました。

こんな汗と涙と笑いの思い出が残る6号館があった場所には、いま(仮称)南棟が建てられています。その塔屋には、より優れた環境の無響室(音響実験室)がリニューアルされるので、皆さんも研究や授業の中で体験できる機会があるかもしれませんね。まもなく5号館の姿も見納めとなりますが、新天地の南棟でみなさんと新たな思い出づくりができれば良いなあと思っています! 図

column

海を越えた地で評された興奮



「5号館」は、格調ある評論で世界に認められていたイギリスの建築雑誌「Architectural Review」に掲載された。この雑誌は、建築史家、評論家として著名なN.PevsnerやJ.M.Richardsなどが編集に関わったもので、毎月、世界各国の作品や建築思潮を紹介していた「World」という欄に取り上げられた。

「打放しコンクリート、ホーローブロック、アルミニウムサッシュの中に潜む強靱な意志のデザインは、単に良き教育的デザインとして大いに賞賛される」といった評論に対して、学内誌『駿建』の前身である『連子』に、設計者の宮川英二先生は、「5号館を深くみる、その観察のするどさには敬服される。」と記し、関沢勝一先生らも、コメントを寄せていて、当時の興奮が伝わってくる。

Goodbye The Building No.5 Chronicle 1959-2018

COLUMN

7 5号館は、僕らにとって「イエ」だった

text=宇於崎勝也 教授

私が建築学科を卒業したのは1987年3月ですから、学部時代の学年で言えば、佐藤光彦先生、田所辰之助先生、橋本修先生が1年先輩、蜂巣浩生先生が同期となります。学部卒業後、大学院博士前期課程・後期課程へと進学し、そのまま建築学科・不動産科学専攻の助手になりましたので、研究室に4年次に卒研生として所属してから30年以上、5号館に居続けます。

私たちの学生時代は研究室に「住んでいる」という状況にありました。研究室に冷蔵庫や炊飯器、電磁調理器、寝袋などの食や住に関わるものを揃え、研究テーマのひとつでもあった「都心居住」を実践していました。近くにはまだ銭湯もありました。大学に泊まってそんなにやることがあったの？と疑問の声が挙がりそうですが、論文やコンペなど卒研生・大学院生がワイワイ

と何日も議論をしながら作業をしていました。その頃のOBOGにとっては、まさに5号館は「イエ」でした。

長く居続けて、昭和の終盤から間もなく終わる平成の時代を5号館で過ごしてきて、宮川英二先生がこだわったル・コルビュジエ風の色使いや木製の研究室の扉が、改修工事を経てスチール製の引き戸に変わったのはとてもがっかりしました。研究室の扉は常に開けておくという伝統を続けることがちょっと難しくなりました。今日、エレベータホールにはコピー室が増設されていますが、もともとは広いホールで、コンクリート製の重いテーブルと壁に取り付けられた木製のベンチがあり、居心地は良くはないのですが、上記のような状況でしたから、よくベンチで仮眠を取っていたことも思い出です。

大学院生から助手になった頃、7階の



2000年ごろの輪講室。

2000

577B室が都市計画研究室でした。廊下を挟んで目の前が物理学科の科学史研究室で、研究分野は全く違いましたが、われわれが騒いでも温かく見守ってくれていました。研究室ではときどき食材を持ち込んでワイワイと飲食をする会を開きましたが、物理学科の先生もお誘いして、飲みながらいろいろとご指導も受けました。

5号館の思い出は尽きません。研究室は9階に移りましたが、今でも変わらず毎日の生活の場として、自宅とともにかなりの時間を過ごす場所となっています。今でも在室時には扉は開いています。研究室は常に開かれ誰でも常に受け入れる。この伝統が「(仮称)南棟」でも引き継げたらと考えています。

■

1994



1994年6月23日、屋上での懇親会。

ずっと開けっ放しだった 研究室の扉

1988



5号館屋上で同期の大学院生とともに。

あのレム・コールハースや ダニエル・リベスキンドが5号館に！！

8

COLUMN

5号館の思い出

text=佐藤慎也 教授

5 号館との出会いは1989年、大学2年のとき。設計者である宮川英二先生は既に他界されていて、建築計画の教科書を書いた先生という存在でした。しかし、所属研究室の指導教員だった小谷喬之助先生が5号館の設計に関わっていたことから、設計や建設のときの話をよく聞かされました。その中でも特に印象的だったのが、シェルを用いた特殊な基礎を施工するときのエピソードです。技術が確立していない中で、等厚のシェル基礎をコンクリートで打設する現場の様子は、ほとんど笑いにしか聞こえませんでした。

5号館では、設計や論文など、さまざまな作業も行いました。卒業設計でインスタレーション的な作品をつくったときは、深夜にスライド室の椅子を廊下にすべて出し、実際に設置したものを写真に撮って提出しました。そんなに悪い作品ではなかったのですが、図面や模型が並ぶ中で写真だけの卒業設計は、当時の先生方には全く見向きもされませんでした。

作業のために多くの時間を過ごした研究室には、カラフルな間仕切り壁や本棚があ



スライド室で行われたレム・コールハースのレクチャー。

1992

り、それらは5号館の中で最も好きなデザインでした。現在の1号館の設計者である高宮眞介先生の助手をやっていた頃、全く同じデザインで本棚を増設したものです(今でも設計講師室の奥に残っています)。

5号館は、数々の建築家のレクチャーを聞いたり、講評を受けた場所でもありました。その中でもいちばん印象に残っているのは、1992年のレム・コールハースのレクチャーです。今では信じられないような話ですが、現在のスライド室1でレクチャーが行われたのです。それは大学院生のとき、「フジタ・都市講座」という冠講座が開催され、世界中から2年間で12人の建築家が日大理工にやってきました。ダニエル・リベスキンド、ラファエル・モネオ、アルヴァロ・シザなど、今でも超一流の建築家ばかりです。コールハースが来たのは、『S,M,L,XL』の

出版(1995年)より前のことです。その大著で展開した「ジェネリック・シティ」に通じるような意味で、5号館のことを「コンテナ・ビル」と評価したのです。コールハース特有のアイロニカルな言い方であり、5号館が建築学科教員の総力を集めたものであることを考えると、それを複雑な想いで聞いたことを覚えています。コールハースはこのような語りました。「私がコンテナ・ビルと呼んでいる、全く中立的な日本の建物。それは特に醜いとも言えない、無のようなものです。その中に美しさが非常に限られて存在しています。……日本の建物の大半は中立的なものであり、私達の注意力に何かを要求するものでもなければ、感情に何かを強要するものでもないのです。中立であるから。それはただそこにあるだけなのです。」

図

1992



特別会議室で行われたダニエル・リベスキンドとの懇親会。本杉先生、渡辺先生、田所先生、矢代先生の姿も。

1992



スライド室で撮影した卒業設計。

9

COLUMN

建築を教えてくれた「5号館」 建築学科歴史の要石「5号館」

text= 今村雅樹 教授



1988

写真1 宮川英二先生：1988年の大学パンフレットより。



写真2 大学院生時代：宮川先生に頼まれて作成した「ヒルトップホテル」計画案バルサ模型。

この5号館で恩師プロフェッサーアーキテクト・宮川英二先生に出会わなかったら、建築家への夢は実現していなかっただろう。そして、建築家になって大学に戻ってきた後、「再生5号館」として耐震改修工事を総合監修し、更に新時代を迎えた今、この5号館を解体し、「(仮称)南棟」へ引き継がせるという恩師との2代にわたる日大理工建築の成長プロセスに関与できた(否、させられている)のは宿命であろうか。

— 出会い —

1970年代後半、ビシッと決めた背広に黒縁メガネの宮川先生(写真1)、長髪でジーンパン姿の建築学生の私は、宮川先生を通してル・コルビュジェ風の建築家像を刷り込まれていったに違いない。思い返せば2年生のとき、設計担当のある先生とデザインの意見が全く合わず、十二指腸潰瘍を患い嫌になっていた私に「良いデザインじゃないですか」と拾ってくださったのが、宮川先生との出会いであった。

今思うと大学院生の頃の週1回の研究室当番のとき、京都出身の宮川先生と長崎生まれの私は、風土・風習・祭りなどの文化論で話が盛り上がったことを覚えている。普段はC.スカルパやF.アルビーニのイタリアデザインから、村野藤吾、吉田五十八の数寄屋ディテールにわたるまで、茶飲み話の



写真3 旧5号館の木造システムパーティションと改修後の研究室階廊下。



写真4 本郷通りファサードの変容：1～2階に新設した制振ダンパーと、3階に設けた免震装置。免震カバーを極力目立たせない工夫がされている。

建築談義の話し相手に小僧の私を選んでいただいたことも、今となっては贅沢な時間をいただいていたと感謝である。「君は村野藤吾先生のところに行きなさい」とまで推薦していただき、村野先生へのラブレターの添削までしていただいた。すべてこの5号館7階の研究室での出来事であった。

当時はオイルショックの後、大阪の村野事務所も仕事がなく、「来ていただいてもお掃除当番しかありませんので、待ってください」とのこと。では、待っている間に**伊藤喜三郎**先生のところで勉強しなさいと紹介していただき、当時事務所で参加した「**群馬女子大コンペ**」などが面白く、修士論文と並行して、大学院生時代は、ほぼ設計漬けだった。

5号館での週1回の研究室当番は、宮川先生の昼食パンを買いに行ったり、お茶汲みもしたが、先生との建築話の楽しさ(写真2)や、オリジナル設計の木造パーティション(写真3)でつながっていた兄弟研究室・**小谷喬之助**研究室の当時助手だった**本杉省三**先生との演劇論で盛り上がり、すぐに時間が過ぎていく。田舎から出て来た私には5号館が「家」のようで、そんな豊かな「時間と空間」を5号館はつくってくれた。

— 再生5号館 —

2000年、大学に戻ってからは耐震補強を通して恩師の建築に手を加える際に、先

生亡き後の奥様からは「今村さんが手を加えるのならば、主人は喜んでくれるわ、お任せします」との言葉。当時の5号館は、耐震能力の欠如だけでなく、クラックによる雨漏り・その美観を考えない塗装による補修跡・本郷通りの排気ガスでの汚れ・酸性雨によるコンクリートの劣化・サッシ崩落の恐れ……など、老体に鞭打って必死に建っている状況(写真4)であった。

1950年代機能主義の時代、ネオ・ブルータリズムRC打放しの風貌で日大理工建築のシンボルだった「5号館」が、その意図と反して建っている姿に、再生するために宮川先生が日大に呼んだのかな……と思った。

それまでキャンパス計画を主導されてきた**高宮眞介**教授の後を継ぎ、構造の日大を象徴する「中間層免震」「制振トグル」(写真5)などの先端技術を導入し、「日大建築」をアピールする建築各系の力を合わせて再生された、5号館らしいプロジェクトとしてまとめることになった。

RC打放しの上に取り返しのつかない部分補修された塗装をどうするか……。宮川先生の遺言はない。当時の宮川先生の言葉に「コルのマルセイユやインドのコンクリートでは荒っぽすぎて、少々日本の都会地では困るが、しかし四方柱の柱のような、あの日本式打放しの繊細さは期待していなかった」という5号館の外観。お金をかければ打放しも再生できるが予算はない。さ

てさて、宮川先生や小谷先生の恩師・**吉田鉄郎**の「困ったときには白にしなさい」「控えめな白」の言葉が蘇り、白の塗装を施すことにした。

2010年、「再生5号館」は原設計者の宮川英二に加え、その前の日大教授・吉田鉄郎の教えも参考にしながらまとめられ、その結果「BELCA賞」、「日本建築学会作品選集」など評価をいただくことができた。

— (仮称) 南棟へ —

2011年3月に「東日本大震災」が発生したが、中間層免震・制振トグルの甲斐があった、被害も少なく、その後、駿河台キャンパスの中では「1号館」と「再生5号館」が防災拠点となった。それまで見たこともない巨大地震にすべての国民は怯え、同時にすべての建築の見直しが進められた。日大理工はそれ以前から駿河台・船橋両キャンパスの耐震改修計画を進めていたが、その見直しは、待ったなしの状況となった。

「南棟」についての話は別の機会に回そうと思うが、南棟・北棟計画では、さらに日大理工の歴史のはじまり**佐野利器**先生にまで遡る、駿河台コンテキスト(関東大震災・ニコライ堂、本郷通り・駿河台)が重要なキーワードとなってくる。この5号館建築(写真6)は、「日大理工・駿河台コンテキスト」の中のある時期の「時間・空間」をつなぐ大切なフェイズの要石なのである。

■



写真5 中間層免震の外観。

写真6 「南棟」カフェへと引き継がれる「5号館ピロティ・壁面レリーフ」
(デザイン：小野襄先生)。



第41回関西建築研修旅行は、初の金沢へ 探求心を呼び起こす 象徴的な建築をめぐる旅

text = 吉村凌 (M 2 | 田所研)

1

建築史・建築論研究室では、関西建築研修旅行（2～3月に開催、4泊5日）の企画・実施を行っている。例年、関西地方の古代から近代、現代までの建築を巡るのが常だったが、41回目を迎えた関西建築研修旅行の長い歴史の中で、はじめて北陸地方へ足を運び、高岡の瑞龍寺、金沢の尾山神社・成巽閣などの名建築を見学に加えることができた。また、谷口吉生設計の建築作品見学の際には、非常勤講師の永曾琢夫先生（谷口吉生建築研究所出身）に加わっていただき、資料では知ることのできない設計時のエピソードを聞くことができた。京都では本学OBの熊倉淳さん（熊倉工務店社長）に日程を組んでいただき、工務店視点での伝統や文化に対する姿勢をうかがえた。関西圏に影響を受けた地方の建築を、奈良・京都の建築と比較し合えた点が今年の成果のひとつであった。

一方で、今年の旅行は上記以外の魅力にも溢れていた。それは、「建築以外のある要素」に焦点を当てている3つの建築物の存在だ。「日本独自の美」をテーマとして空間構成を行っている谷口吉生設計の建築（写真1、2）、「甘露台」(*)を中心に宗教都市を形成している天理教建築（写真3、5）、「三輪山」そのものを御神体として社殿が造営されている大神神社（写真4）である。このような建築の場合、焦点の当て方によって、自分なりの解釈を持って探求することができる。なぜその要素を選択したのか、どこに起源があるのか。それは、美意識、伝統意識、社会性あるいは自我なのか。いずれにせよ、他の建築様式、類似する空間性を持つ建築との比較、時代区分の設定を参加者独自の視点で考察することで、それぞれが異なる発見を得られるだろう。まるで探偵になった気分で真相を探求することができるのも、これらの建築の魅力のひとつではないだろうか。

関西建築研修旅行では、毎年テーマが変わり、そのときにしか見聞きできない企画が用意されている。皆さんもぜひ参加してみてはどうだろうか。

■

※ 礼拝の対象となっている高さ約2.5mの柱。天理教では、教祖の肖像の神格化や、神を具現化しないため、抽象的な柱が礼拝の対象となっている。世界中のどこから礼拝しても正面になるように、対称形となる六角形の形態となっている。五十嵐太郎『新編 新宗教と巨大建築』（筑摩書房、2007年）より。

【日程】

- 2/23（金）高岡、金沢：瑞龍寺（仏殿、法堂、山門、総門、座禅堂、大茶堂）、尾山神社神門、北國銀行武蔵ヶ辻支店、主計町茶屋街
- 2/24（土）金沢：成巽閣、鈴木大拙館、金沢市立玉川図書館
- 2/25（日）奈良：東大寺南大門、天理教教会本部（神殿、教祖殿、祖霊殿、真南棟）、天理大学附属天理図書館、大神神社（二ノ鳥居、拝殿ほか）、當麻寺（曼荼羅堂、金堂、講堂、東塔）、佳水園
- 2/26（月）京都：川畑邸、京都薬用植物園、大徳寺孤蓬庵、智恵夢工房二九
- 2/27（火）京都：大仙院、京都国立博物館平成知新館



2



3



4

写真1：【金沢】鈴木大拙館（2011年/谷口吉生）。周辺を考慮した付まい、回廊を用いた動線計画の他に、自然素材やモノクロームの意匠を用いることで、禅の世界を表している。

写真2：【京都】京都国立博物館平成知新館（2013年/谷口吉生）。既存の本館や周囲の社寺との軸線を考慮した水平のボリュームは、京都が持つ格子状の都市構造との関係を意識して計画されている。

写真3：【奈良】天理教教会本部真南棟。神殿の四方872mを千鳥破風が連続する不燃コンクリート造の建築が囲い、独特な風景を生む。

写真4：【奈良】大神神社拝殿。三輪山を御神体とする、本殿を持たない形式の神社であり、江戸時代に拝殿が造営されるまで、拝殿背後の石垣上、禁足地との境にある三ツ鳥居の周辺を垣根が巡るのみであった。

写真5：【奈良】天理教教会本部神殿にて集合写真。東西南北4つの礼拝場に分かれている神殿は、甘露台を囲う「四方正面」の形式を用いており、天理教独自の空間性を持つ。

5





共に学び、考え、つくる 名建築で過ごす2日間

text = 矢代真己（短大教授）

1



2



3



4

写真1：14チームに分かれて高さを競ったペーパータワー・コンテスト。

写真2：初日の授業プログラムの様子。

写真3：「他己紹介」をするためのヒアリング。

写真4：建物見学の様子。本館最上階の旧食堂部分にて。

写真5：2日目に撮った集合写真。背景が異形の本館。桜は散っていたが、その代わりにプログラムを終えた新入生の笑顔が。

短期大学部建築・生活デザイン学科では、入学してまもなく1泊2日の新入生オリエンテーションを実施している。慣れない大学生活での緊張をいちはやく解き、早い段階で友人を見つけてもらうこと、学びの対象となる建築への関心を強めてもらうこと、そして、教員の顔を覚えてもらうこと、がその主たる目的となる。

今年は4月15日、16日に行った。授業の一環として実施される企画でもあるため、はじまったばかりの船橋校舎の教室での授業とは場所・雰囲気を変えて、オリエンテーションならではのプログラムが仕込まれている。その現場となるのが、建築家・吉阪隆正の設計による、いわば異形の建築が建ち並ぶ、八王子郊外の大学セミナーハウスである。

今年度は91名の新入生を迎えたが、学科創設以来、はじめて女子の学生数が男子を超えることとなった。教員一同、これからの2年間でどのような学年に育っていくか、その第一歩となるプログラムともなるため、楽しみにするところだった。実施当日は、春の嵐が予報されていたが、プログラムのはじまる午後までに、幸い風雨はおさまった。ただし、今春は暖かい日が続いていたため、例年なら見られる満開の桜は残念ながら葉桜となっていた。

初日は、大学セミナーハウスを題材に取り上げ、建築の見方と、学生生活を安全・健康に過ごすための講義を行った後、隣に座った友人の「名刺づくり」と「他己紹介」へと進み、夕食をはさんでA4用紙50枚という同じ条件のもとでつくる「ペーパータワー・コンテスト」に続いた。はじめは、まだ互いに名前と顔が一致しない状態だったが、一連のプログラムを通じて次第に打ち解けていき、ペーパータワーをつくる共同作業では、(今年も)大いに盛り上がった。

2日目は、午前中にSNSの上手な使いこなしを促す講義と、グループに分かれての「建物見学会」を行い、午後は、見学を通じて各自が興味を抱いた建物のスケッチに時間を費やした。今年度は多くの建物の内部見学の許可が得られたため、例年に増して感じるところや発見があったようだ。

オリエンテーションの実施後、少々、授業中の教室が賑やかになった。教員が「授業中は静かに！」と叱らざるを得ない場面も出てきたが、半面ではしったり顔。今年もどうやら所期の目的は達せられたようである。

駿



5

オウケンカフェ vol.44 2018年4月25日（水）

ゲスト：小野志門（建築家）

月1回のレクチャーシリーズ「オウケンカフェ」は、毎月末水曜日に開催しています。
第44回のゲストは建築家の小野志門さん。
今回は3名の学生の皆さんの感想レポートをお届けします。

#01

SEKAIのプロジェクトを手伝ってきて思うこと

text = 菅野匡晴（M2 | 佐藤光彦研）

私は、学部3年生の頃より、小野先輩たちが主宰する設計事務所 SEKAI のプロジェクトのお手伝いをしていました。レクチャーに登場した曳屋による住宅の模型を製作したり、現場に行き、竣工後の写真撮影の準備をしたり、さまざまなフェーズに継続的に関わってきました。

組織事務所に勤めながらアトリエとしての活動もする。それを実現させているのは、ある種の使命感からではないだろうかと思えます。先輩方の考えること、仕掛けようとしていることを、毎回、面白いと思って、誘われるたびに参加しています。

私も来年からは企業の中で建築設計職に就く予定ですが、働く立場になって、先輩を突き動かしている建築への想いの強さに、再び驚くことになるのでは、と今から思っています。 駿

#02

建築の終わりの「Why」を考える

text = 須貝仁（3年）

小野さんのレクチャーを聞き、建築の終わりを考えなくてはならない時代において、「How（どのように）」より「Why（どうして）」の部分を考える必要があると強く思いました。なぜ壊されるのか？なぜ残されるのか？なぜ再生されるのか？そして、なぜ終わるのか？

さまざまな物事が過剰に生み出され同時に消えていく現代に、その根底を考えることはとても大事だと思います。この機会に僕も考えてみたいと思います。 駿

#03

コミュニティの持続について考えさせられた

text = 佐藤朝子（3年）

小野さんの話を聞き、コミュニティの持続を大切にしていきたいと感じました。コミュニティというのは、地元とか、周囲の家との関係だけではなく、学校や会社など、それぞれが属している社会における人との関わり合いのことも含まれるとおっしゃっていました。確かに、ご近所付き合いがなくなっていると問題視されますが、人それぞれがコミュニティを持っている今、近所との関係にコミュニティを求める必要がなくなっているのかもしれないと思いました。

建築を新しくつくったり、古いものに手を加える際に、ただ気持ち良い空間を求め、新しく綺麗に仕上げるのではなく、その地で過ごした思い出や、人と人、ものと人の関係性を忘れてはいけなのだとわかりました。

私は新しいものをつくるより、今あるものを大切に、それを活かしたものをつくりたいと思っています。しっかりとものの誕生から終わりまでを考えるという行為は、愛着が増し、ものを大切にすることにつながるので、今後も大切にしていきたいと感じました。 駿



会場に駆けつけた斎藤公男名誉教授（桜門建築会会長）

2018年度 新任非常勤講師からのご挨拶

2018年度は、新たに11名の
新任非常勤講師の先生を迎えます。
各分野の最前線で活躍する先生方からの
メッセージをお届けします。



短大：建築・生活デザインの基礎、建築デザインスタジオI

大塚茂仁（おおつか・しげひと）

2000年千葉工業大学大学院 工学研究科博士前期課程
工業デザイン学専攻修了。2000-01年トゥーン・コール
ハース・アソシエイツ（オランダ）。2001-02年エー
マン・ルーカス・ファン・フフト（オランダ）。2007年
大塚茂仁建築設計スタジオ設立。

コミュニケーションを大切にしてください。デザインの基本はコミュニケーションにあります。先生や友人との会話が、将来の方向性に示唆を与えます。今の私自身も、学生時代の出会いが大きく影響しています。また、図面や模型は説明をする相手にだけでなく、自分自身とのコミュニケーションにおいても大切な役割を果たします。そのコミュニケーションが十分に取れたかどうか、でき上がるものの良し悪しに影響します。私も学生との出会いを大切に、学生時代に私が先生方から多くの学びを得られたように、さまざまなことを伝えられたらと思います。



「four plane chair」



理工：デザイン基礎、建築設計I

大石雅之（おおいし・まさゆき）

2003年東京都立大学工学部建築学科卒業。2005年同
修士課程修了。2005-11年青木淳建築計画事務所勤務。
2012年大石雅之建築設計事務所設立。

どんな部屋で宽ぎたいか考えるとして、窓がたくさんあって明るい部屋がいいかなとか、椅子はまるい形が良くて、とか身近なところから考えはじめる。窓ばかりだと冬は寒いのではと思い、断熱のためにどんな構造を持った物質がどれくらい効果があるのか調べてみる。どのような外装で、外から部屋が、部屋から外が、どのように見えるのが良いか考える。普段から見て触れているものを理解し、目に見えない小さな現象を把握し、広い景色や長い時間の中であり方を想像してみる。さまざまなスケールを行き来しながら、一緒に建築を考える時間を楽しみにしています。



この春に竣工した「尾道の家」の現場終盤の写真。周辺環境も考慮して、部屋から内にも開くことができる半外部空間をつくって、そこでクレーン車が作業している様子。



理工：建築施工法

大貫浩嗣（おおぬき・ひろつぐ）

1993年日本大学理工学部建築学科卒業。同年清水建設
入社。現在は生産技術本部建築技術部所属。

「今」を大切に過ごそう。毎日、大学で
当たり前のようにいろいろ教えていただ
いている先生・先輩と同じ空気を共有
している友達とひとつのプロジェクトに
携わることができる、「建築」とはそんな
素晴らしい職業です。「今」は多くを
学び、そして遊び、人間力を蓄える時期。
努力・好奇心・行動力を持って、学生
生活を過ごしてください。



「GINZA KABUKIZA」

2018年度 新任非常勤講師からのご挨拶



理工：デザイン基礎、建築設計Ⅰ

大平 貴臣（おおひら・たかのり）

2004年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程修了。2004年フリーランスとして住宅・店舗デザインに従事。2007年大平貴臣建築設計事務所設立。2012年OSKA & PARTNERS（オスカアンドパートナーズ）共同設立。

学生時代ほど、まとまった時間を自分のために使える機会はないと思います。その時間をどう使うか？ まずは大学の課題にしっかり取り組むことが大事です。一生懸命やれば、必ず力がついていきます。大学の活動と並行して、ぜひ建築に限らず、さまざまな場を訪れて自分なりの視点を持って体験してみてください。良いと感じる場もそうでない場も、なぜ良いか、悪いかを自分で考え蓄積することができれば、街すべてが教材に見えてくるはずです。歩き回ることが楽しくなれば、しめたものです。学生時代に磨かれた感性は、社会に出て時間を経るごとに皆さんの力になります。



八千代緑が丘駅にあるレストランの計画。ひとつながりのダイニングの中に天井と光により空間を分節することで、さまざまな場所をつくっています。



大学院：サステナブルデザイン特論

小泉 雅生（こいずみ・まさお）

1986年東京大学大学院在学中にシーラカンスを共同設立。1988年同大学大学院修士課程修了。2001年東京都立大学大学院助教授（現：首都大学東京）。2005年小泉アトリエ設立。2010年・首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域教授、博士（工学）。

20年近く前に、日大で大学院の設計課題の非常勤をしました。その後、東京都立大学（現・首都大学東京）で教職に就くこととなり、小泉アトリエという設計組織を立ち上げ、拠点を横浜に移すなど、さまざまな変化がありました。当時教えていた学生も、社会に出て、いろいろな分野で活躍をはじめ、思わぬところで遭遇するようになりました。今回も非常勤という立場で、皆さんとは限られた接点とはなりますが、お互いにとって貴重な時間となることを期待しています。20年後に（私を含めて）ともに成長した姿を見ることができればと願っています。



「象の鼻パーク／テラス」



大学院：建築構造特論Ⅱ

小堀 徹（こぼり・とおる）

1980年東京藝術大学大学院美術研究科建築学専攻修了。同大学非常勤助手。1982年日建設計入社。2004年執行役員構造設計部門代表。2015年取締役常務執行役員海外総代表。2018年上席理事、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修了。

私は東京藝術大学大学院を修了後、日建設計で27年間構造設計を担当し、その後、名古屋、上海で支店長として勤務したのち、海外プロジェクト全体を担当しました。その間にスペイン・バルセロナのサッカースタジアム・カンブノウの設計を受託しました。もともとサッカーをやっていて、FCバルセロナファンでもあったので、それを契機にスタジアムをビジネスから考えてみようと思い、勤務の傍ら早稲田大学の社会人大学院で学びました。それらの経験をもとに、構造設計という観点からだけでなく、さまざまな面から建築について皆さんと一緒に考えてみたいと思います。



「モード学園スパイラルタワー」



理工：デザイン基礎、建築設計Ⅰ

富永大毅（とみなが・ひろき）

2001年東京都立大学工学部建築学科卒業。2003年ミュンヘン工科大学留学。2005年東京工業大学理工学研究科建築学専攻修了。2005年千葉学建築計画事務所。2008年隈研吾建築都市設計事務所。2012年富永大毅建築都市計画事務所設立。

野球で言うと大学1年生って少年野球をはじめて小2くらいなんですけど、もう小4くらいで大半の人が自分にはセンスがないって諦めちゃうような建築教育っておかしくて、野球が好きでうまくなりたくて毎日コツコツバット振るみたいなのが、小6くらいになってようやく周りに差をつけはじめるみたいなのが正しい。これを建築教育で実践するには、まずは自分の好きな建築を見つけてもらうこと、AIが絶対かかわらないような独自の視点でモノを見る力と、それを言葉にする力をコツコツ磨くことだと思っています。学生が楽しく学べるようやっていきたいと思いますのでよろしくお願いします。



「垂木の住宅」多摩産のスギ材4㎡を贅沢に使った千代田区のマンションリノベーション。林業の流通から考え直すことで、コストを抑えつつ無垢材をふんだんに使った森の香りや手ざわりがある住空間を目指しました。



理工：デザイン基礎、建築設計Ⅰ

中村 航 (なかむら・こう)

1978年東京生まれ、日本大学理工学部卒業（高宮眞介研究室）、早稲田大学大学院修了（古谷誠章研究室）、同博士後期課程・助手などを経て2010-16年東京大学大学院助教（隈研吾研究室）、2017年-明治大学I-AUD教育補助講師。博士（建築学）、Mosaic Design代表。

この10年ほど、僕たちを取り巻く都市・社会は大きく変化しています。人類史上最大の変革期とも言えるでしょう。世界の情勢、政治、テクノロジー、経済、トレンド、アート、食、音楽、さまざまに新しいものが生まれ、これまでの社会のシステムが更新されています。それらの箱となる建築(都市)を考えることの重要度は増し、同時に以前のやり方や常識、価値観が通用しない時代です。ですが僕たちにとって、こんな面白い時代はありません。僕も必死で面白いことを探し回り、これまでになかったことに挑戦し続けています。一緒に「イマ」を追求し、新しいものを生み出していきたいと思います。



表参道の不定形敷地を期間限定利用したフードコート・シェアオフィス。Commune 246（現Commune 2nd）のフードコート部分のプロデュース及びCori.の設計を担当。法律的にもキワドイ規制回避をして実現した、世界的トレンドの先駆けのプロジェクト。



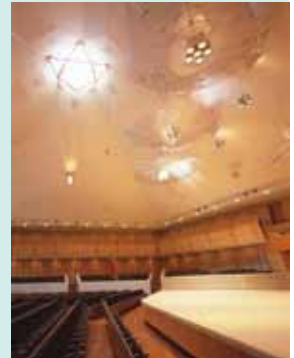
理工：建築設計Ⅳ、Ⅴ

野島秀仁 (のじま・ひでひと)

1993年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了（若色研究室）。1993年KAJIMA DESIGN（鹿島建築設計本部）。現在、同建築設計本部チーフアーキテクト。

「建築をつくる」ことを考えるとき、建築を使う人々がどのように感じ、住まい、体験し、眺め、そして伝えていくかを、常に考えなければなりません。一方でどんなに素晴らしい建物でも、人が建築以外の要素に気を取られたら、建築は全く見えてきません。それでも、人々が器として建築を捉える脳を刺激する。そんな建築を追い求めていくことが大切だと思います。建築家はアリと鳥の視点を自由に行き来しながら図面を描き、それをさまざまな人の手によって、建物につくり上げていける素晴らしい仕事です。ぜひ皆さんと、この楽しい経験を一緒に味わいたいと思います。

「軽井沢大賀ホール」



理工：環境システム解析

矢田麻衣 (やた・まい)

ブリティッシュコロンビア大学理学部物理学科卒業。東京工業大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。同博士後期課程建築学専攻単位取得退学。住環境計画研究所研究員。博士（工学）（日本大学理工学研究科不動産科学専攻）。

皆さん、こんにちは。「環境システム解析」を担当する矢田です。地球温暖化やエネルギー政策の研究に携わっていますが、この授業ではエネルギーに限らず、地球環境に関するさまざまなテーマについて皆さんと一緒に考えていきたいと思います。なかなか普段考えることのない内容かもしれませんが、堅苦しく捉えず、少しでも興味を持ってもらえたり、身近なこととして感じてもらえれば嬉しいです。よろしくお願いします。



ドイツの風力発電の風景



理工：特別講義

与那嶺仁志 (よなみね・ひとし)

1994年日本大学理工学部建築学科卒業。1994-98年構造計画プラス・ワン。1998年-オーヴ・アラップ・アンド・パートナーズ・ジャパン・リミテッド。(2004-08年 オーヴ・アラップ・アンド・パートナーズ ロンドン事務所)

建築の設計は、アーキテクトやエンジニアなどさまざまな人々のコラボレーションにより生み出されます。私は建築家になりたい！と思い入学し、勉強するうちに、建物の根幹を成す骨組みの美しさ、個々の感性・発想力により生み出されるダイナミックな構造に魅了され、「構造」という分野を通じて建築設計に携わる楽しみを知りました。構造設計の専門性はもちろん重要ですが、授業では実際のプロジェクトを通じて構造設計で行われるさまざまな要素を紹介し、実際に建物がどう設計されていくかを学び、将来の実務に役立たせてほしいと思っています。

「道の駅ましこ」
(Photo: ©Arup)

NEWS & TOPICS

2018年日本建築学会大賞を斎藤公男名誉教授が受賞、2018年日本建築学会賞（業績）を重枝豊教授が受賞、2018年日本建築学会著作賞を本杉省三特任教授が受賞

斎藤公男名誉教授が、「アーキニエリング・デザインの理念に基づく、建築学会活動への貢献と、教育・研究・設計の総合的な実績」によって「2018年日本建築学会大賞」（一般社団法人日本建築学会）を受賞した。この賞は、建築に関する学術・技術・芸術の発展向上に長年の業績を通じて、特に著しく貢献した会員に授与される。

また、重枝豊教授が、レモン画翠、小林正美教授（明治大学）、学生設計優秀作品展組織委員会とともに、『『学生設計優秀作品展－建築・都市・環境』による建築設計教育への貢献』によって「2018年日本建築学会賞（業績）」を受賞した。この賞は、近年中に完成した学術・技術・芸術などの進歩に寄与する優れた業績に対して授与される。

さらに、本杉省三特任教授が、『劇場空間の源流』（鹿島出版会）によって「2018年日本建築学会著作賞」を受賞した。この賞は、会員が執筆した建築に関わる著書であって、学術・技術・芸術などの進歩発展あるいは建築文化の社会への普及啓発に寄与した優れた業績に対して授与される。

第7回E&G DESIGN 学生デザイン大賞において建築学科4年の荒井聖己君が特別賞を受賞

「第7回E&G DESIGN 学生デザイン大賞」（主催：東海エクステリアフェア実行委員会）において、建築学科4年の荒井聖己君（佐藤光彦研）の作品「移りゆく四季と場、鳥。」が「公共・都市空間のエクステリア部門」の「特別賞（東海エクステリアフェア実行委員会賞）」を受賞した。本賞は、「第9回エクステリア&ガーデンフェア名古屋2018」において学生を対象としたデザイン企画を募ったもので、43点の応募があった。住空間のエクステリア部門、商業空間のエクステリア部門、公共・都市空間のエクステリア部門の3部門があり、部門を超えて1点が最優秀賞、各部門ごとに優秀賞が授与されたが、公共・都市空間のエクステリア部門では優秀賞に該当作品がなく、荒井君は優秀賞に次ぐ受賞であった。

第3回ウッドフレンズ住宅設計アイデアコンペにおいて建築学科4年の北嶋晃大君が入賞

「第3回ウッドフレンズ住宅設計アイデアコンペ」（主催：ウッドフレンズ）において、建築学科4年の北嶋晃大君（佐藤光彦研）の作品「TOKYO陰日向」が学生の部で「入賞」を果たした。テーマは「都市における小住宅」で、学生の部の応募総数192点から、最優秀賞1点、優秀賞1点に次ぐ入賞8点に選ばれた。

日本建築学会作品選集2018に古澤大輔助教の建築作品「十条の集合住宅」が掲載

建築雑誌増刊「作品選集2018」（一般社団法人日本建築学会）に、古澤大輔助教、黒川泰孝氏、福田章氏（リライト_D）、坪井弘嗣氏（坪井弘嗣耕三設計事務所）の建築作品「十条の集合住宅」が掲載された。本作品集は毎年の優れた建築作品を掲載するもので、今年は海外を含む全国から応募のあった374作品の中から100作品が選出された。また、現在、建築学科・建築学専攻で非常勤講師を担当されている先生方についても以下の建築作品が掲載されている。「東松山農産物直売所」（馬場兼伸非常勤講師ほか）、「メガシティの小さな躯体」（雨宮知彦非常勤講師ほか）。なお、あわせて発表された、「2018年日本建築学会作品選奨」には「東松山農産物直売所」（馬場兼伸非常勤講師ほか）が選ばれており、「2018年日本建築学会作品選集新人賞」を雨宮知彦非常勤講師が建築作品「メガシティの小さな躯体」で受賞している。



荒井聖己君の作品「移りゆく四季と場、鳥。」



北嶋晃大君の作品「TOKYO陰日向」

MESSAGE FROM OB/OG

卒業から〇年、OB/OGから現役学生の皆さんへのメッセージ vol.4

数十年後、 人々の暮らしに 不可欠な存在となる 施設をつくる



川鍋充範（かわなべ・みつのり）

- 所属：東日本旅客鉄道 東京支社事業部開発課
- 資格：一級建築士
- 所属研究室：都市計画研究室（川島ゼミ）
- 修士設計テーマ：路面電車利用者の中心商業地区における回遊行動に関する研究

私の部署では、東京エリアにある駅ビルやエキナカといった商業施設、駅直結のホテルやオフィスビルなどの新規開発・リニューアル・維持管理を行っています。私自身は、主に維持管理に関する工事を担当し、既存の施設が新築時のスペックを保てるように、老朽化した設備を更新したり、より安全性・利便性を高めるような機能向上に向けた工事を担当しています。

まちを活気づける仕事がしたい

学部3年生の海外研修旅行で訪れたヨーロッパで、広場がまちの人々に自由に楽しそうに使われていて賑わっていたことに感動し、まちの中心を賑わせ、まち全体を活気づけるような仕事がしたいと思うようになりました。その後、まちづくりの講義や研究を通して、日本におけるまちの中心は「駅」と考えるようになり、「駅を中心としたまちづくり」として、駅周辺部をよりまちの人々にとって魅力的な空間として賑わせるような開発に携わりたいと考えるようになりました。

仕事をはじめてすぐは、わからないことだらけで、ひとつの作業を進めるにも四苦八苦していました。ですが、先輩方に教えていただく中で、実務は少しずつ進められるようになっていきます。一方で、「想いを持つ」ことの難しさに直面しました。開発という仕事は、「自分はこうしたい」「こうすればもっとお客さまに喜んでもらえる」という強い想いを持ち、その理想に向けて業務に取り組む必要があります。この想いが強く・具体性がなければ実

現しません。常にアンテナを張り、世の中のニーズを見極め、理想を描き続けること、仕事を進めるスタートであり、ゴールとなる想いを持つことの難しさを今でも感じています。

大学で得られること、社会に活かせること

講義や研究を通して得た知識は、仕事をする上でのベースになりますが、直接活かせることはあまりありません。ですが、研究を進めるに当たって、想いを持ち、自ら考え、行動を起こし、成果を出すというプロセスを経験・習得したことは、仕事を進める上で生きてきます。講義を受講する際も本質は同じですが、研究ではより主体的に自身の必要な情報を考えて取りに行く必要があります。そして、そこで得た情報を理論的にまとめ、わかりやすく文章化し、説明していく必要があります。研究を通してこのプロセスを習得できたことは、今、仕事を進める上での土台となっていると感じています。

数十年後、未来への想い

会社内のさまざまな部署に、先輩・後輩がいます。仕事を進める上では、実務を教えてもらうだけでなく、新しい価値観を得ることや、いろいろな相談をしたくなることがあります。このようなときに、同じ大学の出身というだけで話やすさが大きく変わります。日大建築出身者の集いが毎年開催されており、そこでの情報共有やお悩み相談ができることは大きな力になっています。

携わった物件が10年後、20年後、自分がおじいちゃんになったときも、まちの人々に愛され、まち全体を活気づけ続けている存在となっていればと思います。建築工事の仕事をしていると、完成した際に大きな達成感を得られます。ですが、それ以上に、完成から何年経っても人々に使われて、暮らしの中心となり、まちに馴染んで必要不可欠な存在となっている姿が見られたときの感動は大きいと思います。これを目指して、日々の業務に取り組んでいます。



「JR新宿駅・JR新宿ミライナタワー」

ARCHITECTURE & ME

[連載] 私と建築 vol.92

趣味としての私の建築

text= 神田 順 客員教授

学 生時代には、構造設計をやるつもりでいた。短い期間ではあったが、竹中工務店に就職していくつかの建物の構造設計を経験させてもらった。1980年からは、東京大学で荷重論と信頼性設計についての講義を長く担当した。自分では構造安全論を大きなテーマにおいて、研究・教育に携わってきた専門家のつもりである。

したがって自宅の設計は、言い訳のようにになるが、趣味としての建築ということになる。100分の1の平面から立面や模型、パースまでの基本設計を行い、実施設計は友人に依頼したのもディテールの選択肢が広がり楽しめた。

父が1983年に逝き、母と住むことになり、マンションから自分の育った家に子供3人を連れて戻った。父の残した家は、戦後すぐにつくられた金融公庫融資制度第1号のモダンな木造2階建てである。土木の技術者であったが、設計には随分と心配りがされていた。それでもさすがに、風呂や台所は使いにくく、まずその部分のみを改築した。庭を少し削り、6人で食事のできる丸テーブルのために食堂を円型にした。それに風呂と台所を合わせて前方後円平面の陸屋根コンクリートブロック造の楽しい空間を生み出すことができた。地下には戦時中の防空壕があって、それをまたぐために、べた基礎と屋根がコンクリートスラブの堅固な箱となっている。



東馬込の家（1992年5月竣工） スキップフロアになっている。私道には花壇のみで堀なしとした。

下の子が小学校に上がり、1年間アメリカで家族5人の生活を経験し、子供たちにそれぞれ部屋を与えたいと残りの部分も建て直すこととなった。アメリカでの生活の影響もあって、地下室を設け、屋上はプールのスキップフロアの家というような夢を絵にすると、想定予算の倍以上となり、RC壁式構造を考えていたのを、地下・半地下のみRCで他は木造にした。部屋の構成は、ももとの住まいをほぼ踏襲した形であるが、半地下をガレージにして、屋上は木造でも陸屋根で外に出られるようにした。これは、結構雨漏りを呼ぶこととなったものの、今も屋上で花見をするなど、無理して良かったとの想いはある。

1947年、岐阜県生まれ。1970年、東京大学工学部建築学科卒業。修士課程修了後、竹中工務店にて構造設計業務に従事。1979年、エディンバラ大学PhD取得。1980年、東京大学工学部助教授。同教授を経て、2012年、同大学新領域創成科学研究科教授を定年退職。2003年より建築基本法制定準備会会長。2012年、日本大学理工学部特任教授。2012年、東京大学名誉教授。

大学が新しいキャンパスを柏に展開した際に、歩いて通える土地を探した。これもアメリカの大学での教員の住まいの影響があったかもしれない。50坪の土地に、45°の切妻で建築面積13坪の屋根裏付きのひとり住まい用である。南側に40坪を借りて庭にすることができて、これまた快適な空間が生まれた。この家は、今は、週に1、2度出かけて庭で気持ち良い時を過ごす形で使っている。しばらくして気になったのが、継手金物である。せっかく梁や柱が組まれているのに、なんとかならないものかと思った。



「流山市青田の家」（2002年8月竣工）手前は空き地（市街化調整区域で建築不可）

大学の定年を迎える1年前に東日本大震災が起きた。そして、釜石市の唐丹という漁村集落の復興に関わることとなった。構造の専門家の枠を超えて、建築まちづくりを手探りで良いからできないかと仲間呼びかけて、活動拠点の家を建てる機会を持つことができた。ひとりですることではないからと、株式会社組織にして株主を募り、会社の事務所兼住宅用の家を、伝統木造で、唐丹湾を見下ろす小白浜の60坪の敷地に、建築面積19坪の総2階建てを2017年9月に竣工することができた。現地の杉を使った木の香りのする家である。山形県鶴岡の棟梁翺持猛雄氏の手で刻んだ仕口・継手を眺めるだけでも心がはずむ。

現在のところ3つの家をお守りしている。いずれが自分の終の棲家になるのかと思うときがある。眠り、食べ、友と語る空間がそれぞれに異なる構成になっているが、建築を考えることが生きることを考えることと少しずつ思えるようになってきた。

駿



「釜石市唐丹町小白浜の潮見第」（2017年9月竣工）まちづくりの拠点としてスタート

Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

さよなら 5 号館 クロニクル

- COLUMN 1 | 共に過ごした16万時間以上の時間 text=井上勝夫 特任教授
 COLUMN 2 | 5号館への想いを未来への希望に置き換えて text=大川三雄 特任教授
 COLUMN 3 | 時代が変わる時 text=本杉省三 特任教授
 COLUMN 4 | プロの住む宮殿だった5号館 text=重枝豊 教授
 COLUMN 5 | 私と5号館 text=根上彰生 教授
 COLUMN 6 | 緊張に満ちていた5号館の研究室 text=橋本修 教授
 COLUMN 7 | 5号館は、僕らにとって「イエ」だった text=宇於崎勝也 教授
 COLUMN 8 | 5号館の思い出 text=佐藤慎也 教授
 COLUMN 9 | 建築を覚えてくれた「5号館」建築学科歴史の要石「5号館」text=今村雅樹 教授

14 [REPORT]

- 関西建築研修旅行2018
 短大：新入生オリエンテーション2018
 オウケンカフェ

17 [NEWS & TOPICS]

- ・2018年度新任非常勤講師からのご挨拶
 - ・2018年日本建築学会大賞を斎藤公男名誉教授が受賞、2018年日本建築学会賞（業績）を重枝豊教授が受賞、2018年日本建築学会著作賞を本杉省三特任教授が受賞
 - ・第3回ウッドフレンズ住宅設計アイデアコンペにおいて建築学科4年の北嶋晃大君が入賞
- ほか

21 [Message from OB/OG]

- vol.04 数十年後、人々の暮らしに不可欠な存在となる施設をつくる
 川鍋充範（東日本旅客鉄道）

22 [Architecture & Me]

- vol.92 趣味としての私の建築 text=神田順 客員教授

24 [Visit & Criticism]

- 学生建築探訪 vol.6 開かれた建築をつくる想像力について text = 倉田慧一（4年 | 古澤・二瓶研）

SHUNKEN

2018 Jul. Vol.46 No.2

「駿建」

発行日：2018年7月1日

発行人：重枝豊

編集委員：佐藤慎也・宇於崎勝也・橋本修・山中新太郎・石鍋雄一郎・

古澤大輔・道明裕毅・堀切梨奈子・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

Visit & Criticism

学生建築探訪 vol.6

開かれた建築をつくる 想像力について

text = 倉田慧一(4年 | 古澤・二瓶研)

「今は？」

「今は、どちらも無い。あるのは中距離だけ。近接作用も遠隔作用もなく、ただ曖昧な、中途半端な、偽の現実だけ」

—池澤夏樹「スティル・ライフ」



今回は私の手元にある「新建築」の最新号5月号から建築作品をふたつ取り上げようと思う。まず訪れたのは「東京ミッドタウン日比谷」だ。日比谷公園の向かい、「日生劇場」の隣という一等地に建つコンプレックスで、低層部に商業施設とシネコン、高層部にオフィスが入る。ふたつの街区を合わせた際に廃道になった区道の部分はパブリックスペースとして開放されていて、有楽町駅寄りの敷地の角には円形の広場が作品全体の中心的な場所としてデザインされている。ルーフトラスは、百尺規制に合わせてデザインされた低層部ファサードの屋上で、日比谷公園と皇居を一望することができるとともに、「建物内から公園の豊かな緑を感じるだけでなく、公園からも建物内のアクティビティが感じられるような呼応関係を創出」しているそうだ。



しかし、見学を終えて日比谷公園でのんびりしていたとき、ふと顔を上げて目に飛び込んできたのは、この説明から想像するのとは違う光景だった。日比谷公園は東京市区改正設計で計画され、1903年に開園した歴史ある公園で、開園後に寄せられた沢山の献木が今では立派に育っている。設計者の誤算か、それともシラを切っているのか、ほとんどの場所で背の高い樹木越しに見えるのは、ジェネリックなミッドタウンの高層部だけである。ミースのガラスの摩天楼案を極端に控えめにデザインし直したような、微妙に波打つ(Dancing Towerというコンセプトのような)ファサードが、他の同じような構成のビルと並んでいるのが見えるだけである。誌面には、「日比谷という土地の持つポテンシャル」を活かすために「広域的な視点から日比谷の街全体の将来像を描く」ことで「日比谷の価値を高め続ける」ことを目指すとある。しかし、日比谷のポテンシャルである成熟した文化は、日比谷を訪れる人によってつくられているのだから、敷地の外の街を歩く人の視点が欠けたデザインは、この場合、致命的なものではないか。敷地内の外部空間が魅力的なだけに残念だ。何十年にもわたって日比谷に建ち続け、多くの人に使われる建築だからこそ、そこで時間を過ごす人々の感覚への想像力が必要なのではないだろうか。



もうひとつ、5月号に掲載されている作品を並べて考えてみたいと思う。miCo.による「等々力の小さなシェアオフィス」だ。この作品は、五叉路の鋭角の角に建つ設計事務所と工務店のためのシェアオフィスである。台形平面のうち、3辺が街路と接していて、各室がそのうち1辺に大きな開口を持つように、打ち合わせ室、執務室、工作室の3部屋から構成されている。言い換えれば、

それぞれ他の用途(打ち合わせ・工作・執務)として使える「エントランス(もしくはショーケース)」が3つある、そして、それだけでできている、という建築である。一般的には、エントランスとは内外の接続部として機能し、その奥にメインの空間が待ち構えているものなのだが、この作品では、「エントランス」の奥にあるのは別の方向に口を開けた「エントランス」なのである。首より下のないケルベロスとでも言ったら良いだろうか。それぞれの「エントランス」の浅い奥行と、2,900mmの天井高によるプロポーションは、建物の1階部分だけが突然変異して道路に付属した縁側になってしまったかのような印象を与える。また、各「エントランス」同士を仕切る即物的な銀色の素材は、道路を客席と見立てた舞台のように「エントランス」を見せている。それぞれの「エントランス」が内外の調停をあえて失敗し続けることによって生まれる空間の質が、この建築が面する交差点から徐々に街へと向かって広がっていくように感じられた。

ステートメントの結びの「都市のスケールから見れば粒のように小さなスケールの設計も、おのおのの空間が、おぼろげながらその街の全体像を想像すること、その積み重ねが重要だと考えた。」という文章に共感する。ここで誰(何)が「想像する」のかかぼやかされていることは意図的なかもしれない。建築家が設計するときに想像する、散歩をしている人が大きな開口の前を通りかかるときに想像するなど、さまざまな想像力が重なり合うことが重要なのだろう。また、「街の全体像」とは、単純にその街の建物やインフラの総和という意味ではないだろう。案内してくださったmiCo.の篠原勲さんは、敷地周辺のスケール感を強調されていたけれど、今日の前にある物理的な環境だけではなく、その背後にある街特有のスケールやリズムのようなものへの「想像力」が重要なのではないか、という意味が含まれているように思われる。

建築は、長い間にわたって、さまざまなバックグラウンドを持つ人に開かれたものでなくてはならない。今日の前にある現実からの要請を空間化するだけでは、将来は排他的な仕方では人々をフレミングしてしまうかもしれない。この難しい問いに立ち向かう活潑な想像力が大切なのではないだろうか、と「新建築」5月号を片手に建築を見る中で考えた。

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>